

嬉泉の新聞

- 嬉泉の新聞/第30号/1995年(平成7年)3月発行(年3回発行)
• 発行所=社会福祉法人嬉泉・東京都世田谷区船橋 1-30-9 (〒156)
TEL 03-3426-2323
• 発行人=石井哲夫 • 編集人=友田篤

「社会福祉の世界に仲間入りして」

小林 隆 児

大学を卒業後13年間私は在籍した医学部から7年前に教育学部へ、そして昨春からは現職の福祉の世界へと転々としてきました。この頃では医学の世界にいると居心地の悪さを感じるほどになってしまいました。自分の歩んできた道を振り返ると、まるで障害を持った子どもが最初に医療の世界で治療を受け、学校に入って教育を受け、卒後は福祉施設のケアを受けるようになっていく人生の歩みと同一歩調をとって今日までやってきたようです。実際、私が長年お付き合いしてきた子ども達への発達援助を考えていくと必然的にそうなるわけですから、自分にとってこのような歩みはなんとなく宿命的なもののように感じられるのです。

教育と福祉の世界の両方に多少なりとも足を踏み入れてみますと、外から見ていたのでは到底分からないようなことを教えられます。教育の世界はそれなりの学問的な歴史を有していますから、かなり既存の制度や理念という枠に縛られているという思いを強く印象づけられました。教育関係者にはどことなく聖職者意識と強い使命感に縛られ随分と肩に力が入っている人が多いように感じました。どことなくこうあるべきだといったドグマが支配しているようなところに違和感を抱いていました。それに比して福祉の世界はまだまだ学問の形を成していない、暗中模索の混沌とした世界のように思いました。

福祉の世界は障害児者の生活総体を世話し援助していくことを基本としていますから、どろ

どろとしていてあまり学問的な世界には馴染まないようなところがあるのは仕方のないことかもしれません。

ただ医学、教育、福祉の各々の世界に身を置いてみて痛感したことは、いかに相互に相手の世界のことを知らなすぎるかということでした。同じ日本人であるにもかかわらず、お互いの用語が相手に通じなかったりすることはざらです。正直いってどうもお互いが積極的に交流を求めているようには感じられませんでした。

どうしてそうなのでしょう。理由はいろいろあるでしょうが、一番の理由は、各々の活動の基盤となる学問の世界で相互の交流を求めていなくてどうにもならないという必然性がいまだ乏しいからだではないかと私には思われました。障害児を人間総体として、共同世界の仲間としてとらえて理解していくという枠組みがいまだ各々の世界には生まれていないからではないでしょうか。

そんな思いを抱きながら、これから取り組まねばならない社会福祉の世界では、いままで十分に理解できていなかった障害を持った人々の生きざまに直接肌で接しながら、今までの狭い枠組みから少しでも脱皮していくことが、これからの障害児者療育を考えていく上でとても大切な課題であると私には思えるのです。

(東海大学教授・健康科学部社会福祉学科)

創造的福祉施設処遇論

福祉施設をめぐるホスピタリズム論争が展開されたとき、当時の乳児施設関係者は、これを肯定し養護技術実践にエネルギーを注ぎ始めた。福祉施設の積極性について考えると福祉施設には、そのままでは、養護効率性から考えて、個別的な親子関係を補填するようなことは不可能と考えられる。しかし実践経験者は、人間関係が集团的に機能する効率性を体験するのである。一人一人に注がれる職員の養護努力は、家庭における母親のそれに及ぶべきものではないが、一人の子どもに注ぐ愛情がそばで見ている他の子どもにもよい影響があるということも分かってきている。自閉症児が集団状況に入れないが、集団状況に入れた子どもは、急速に指導者の意図を理解する状況になっていくことが分かるのである。このような集団教育の増幅的效果として一人の人に注ぐ愛情も見ている人に観客効果をもたらすことが分かってきた。そこから集団養育技術の創造が認められることになるわけである。

集団養育技術に関して、かねてから私は、積極的養護理論を展開

してきた。福祉施設という人工的な仕組みの中で、対人援助を積極的に行うためには、福祉施設で働く職員の目標と方法に関する了解が必要になってくる。福祉施設における古く新しい問題は、人に対するサービスの提供という概念である。このための目標や方法に関しては、きわめて未開拓であるといふ言いがたい。福祉施設と宗教との関係は、古くからあるが、慈善事業が宗教者の献身的なサービスによって成

施設経営の創造性

(その二十一) 石井哲夫

り立ってきたことで、それこそ奇特なことであった。慈善というすべてこれを排除しようという考えがあるが、ボランティアという人のために尽くすということこそ福祉の最重要徳目として重要視していかなければならないと思っ

ている。徳目としては、これを愛情論としてアガペーの愛としか言

でのサービスというものが、自然に職員に分かってくるものとして、各自の自発的な研鑽に委かされていくが、実は、これが問題であった、そう簡単に各自に委せられるものではないのである。福祉施設の集团的な状況の中でこの問題を解決していかなければならないのである。施設職員にとっても、福祉援助を集团的に取り組む際のサービス活動について、前述の集団における増幅性を積極的に活用していかなければならない。

社会福祉援助における相談育児介護などという対人援助活動は、優れて「対人的な受容と関わり」であって、そこに信頼感の形成が求められてくる。信頼感こそ福祉施設において、研究しなければならぬ徳目課題なのである。この信頼という徳目について考えてみると、まず相手に好意を持ち続けることであり、相手が自分について考えていることやする事が安心できることであろう。また此方から相手に好意を持ち続けることによる状況の変化であろう。

古くから教育的な効果としての、愛を注ぐ善意の営みによって、援助者が浄化されてくることを高く評価している。福祉施設こそは、利用者が求める信頼関係をできるだけ早く確実に結ぶことのできる組織体として構成していかなければならない。人工的に行っている福祉援助が、人間の徳目に触れる思想信条の集团的な発信基地としての施設において初めて有効になされるはずなのである。しかるにボランティアを失っている施設がこの考えとはほど遠いところに位置していることを知るので、今こそこの壮大な人間援助基地の効用を世に問うときではないかと考えているのである。

私たちが職員研修において、感じてきたことは、この徳目に沿った基本的な学習を考えず、知識技術に偏りすぎていたことである。若い人たちが福祉に進んできている初心を常に大切に喚起してもらおうと、利用者の援助が必要な状況に気づくことを求めたいのである。そこから今自分が直面しているこの仕事の真の価値や自分自身に気づくことにもなるのではないかと考えているのである。

私たちの

レポート

須藤福祉センター各事業所からの報告

高島平五丁目福祉園 「終結に当たっての思い」

金沢 信一

平成七年三月三十一日で社会福祉法人嬉泉の板橋区立高島平五丁目福祉園の管理運営が終了します。

私は、石井所長の命を受けて、長年住み慣れた袖ヶ浦を離れ、平成三年四月の開設から平成七年三月の終結までの四年間を高島平五丁目福祉園で過ごしました。

初年度は、園舎すらなく、八月までは、都立板橋養護学級の三室を借りていました。準備期間もなく、渡辺園長以下なれない中すべてが手探りでした。そんな時に板橋養護の先生方は私たちをソフトボールに誘ってくださいました。

八月によく園舎が完成し、高島平五丁目の地にやってきました。開設前に各養護学校、区内の福祉園などを他の職員とともに訪

ねた日々が懐かしく、整形外科の下河辺先生、動作法の中島先生との出会いがありました。

二年目には、酒井園長を向かえました。

三年目から、私が園長となり、赤塚福祉園に行った利用者にかわって新しい利用者を迎えました。高名な自閉症援助者の片倉さんを講師に迎え、また新しい高島平五丁目福祉園が始まり、そしてお別れの日を迎えました。

これまで板橋区の福祉課の方々、赤塚・志村・板橋の福祉事務所の福祉司さんには大変お世話になりました。重度障害者通所施設の集まりではデイセンターやまびこの柴田さん、安藤さんら多くの同じ志を持った仲間と巡り会いました。



四年間がまさに走馬燈ながらで、つい昨日のように鮮明です。出会いがあり、別れがあり、辛い経験を持ち、当分思い出という美しいフィルムに霞むことはないでしょう。ABC体操、動作法、調理、カラオケ、ダンス、ワープロ、新聞作り、習字、木工、ビーズ、籐細工、箱作り、刺繍、ディスクジョッキー、「ミラクルワールド」、誕生会、クリスマス会、赤塚公園、タケノコ公園、溜池公園、赤塚大仏の散歩、光が丘、葛西臨海公園、都庁、上野の美術館、伊豆、横浜中華街、デイズニール

ンド、シェラトンでの食事、八景島、豊島園、東京タワー、北スポーツセンターや赤塚体育館でのプール、T君に連れられていった武蔵野競技場も道満グリーンパークでのバーベキュー、納涼パーティー、スポーツ大会での感動、七宝焼が売れたこと、シモネタ満載爆笑食事(カレーウドン)、思い出の中でみなさん一人一人の表情、しぐさは終生忘れないでしょう。

保護者のみなさんの園への暖かいご理解への感謝の気持ちにはことに尽くすことが出来ません。

利用者のみなさん、ある時、私たちがここから去らなければならぬことを知り、とうとう、その日が来ました。プレハブの、小さな光のよく入る白い建物から私たちは今去っていきます。いつもみなさんのバスを見送る私たちを今度はみなさんが見送ってください。明るく見送って欲しいと思います。高島平五丁目福祉園と言う変わった名前の福祉園を私は愛していました。さようなら、みなさん、さようなら、高島平五丁目福祉園。有り難う。

(高島平五丁目福祉園園長)

職員の思い

ある真剣なやりとりから

坂本 麦彦

随分と昔のことである。K君は渾身の力を込めて、憤激の気持ちを全身で表わしていた。「なんとかしてくれよお…」助けしてくれよお…」と言わんばかりに激しく暴れた。我々も又、渾身の力で彼の憤激に抗していた。馬鹿力のK君を3人で、一人は右腕を、一人は両脚を、そして私は彼の顎を支えながら、もう一方の腕を抱えていた。何かを語りかけていた様に記憶している。「頑張れ！」だったか「ぜんぶ吐き出せ！」だったか「つき合ってあげるぞ！」だったか忘れたが：初夏の頃だったと思う。K君の額から汗が、瞳からは大粒の涙が流れていた。我々の額からも汗が滝の様に流れ出ていた。何分、否何10分、K君の憤激と渡り合っていたのだろうか。徐々にではあるが緊張と不安に縛られていたK君の体が弛緩し始めてきた。私は彼の顎から、そして腕からゆっくりと手を離していった。そして離し切ったその、次の瞬間、驚嘆、いや感嘆すべきことが起こった。

彼はそれまで嘔みしめていたタオルを自身の手にとると、眼前に拭いてくれたのだ。それも皆で、女房にさえしてもらったことのない様な優しく、しかも心のこもった手つきで……

「甘い」とか「感傷的だ」とか「そこには全く別の意図があった筈だ」とか揶揄したい方、意見したい方は御自由にどうぞ。その時は、行為の歪みはどうあれ彼等は皆、嘘のつき切れない、真面目で淋しがり屋の輩。つき合っているのはとても大変だと思った。

(袖ヶ浦ひかりの学園)



自分との勝負

小山 徹信

就職して四年。今年、新たな気持ちで年度当初に立てた目標は、『自分との勝負』です。今まで、袖ヶ浦、世田谷、板橋と三年で三ヶ所に勤務してきましたが、今年初めて板橋で二年同じ事業所で仕事をやらせてもらうことになり、気を引き締める意味でこの目標を掲げました。

私は、自分勝手なわがまま・相手の気持ちを理解できないところがあり、そこが自分の短所であると認識してきました。しかし、そういう自分が嬉泉に就職し、石井先生の話しを聞き、主任の先生や、先輩方の関わりを見ていくうちに感銘を受け、まるで宗教にでもはまったかのように引き込まれ、自分自身が変わっていくことを感じました。

当初、自分の弱い気持ちというのはなかなか消えず、特に、利用者がパニックを起こした時など、力で押さえたくなってしまふ、という「自分」が時々顔を出してきます。そういう時、心の中で「負けるな、我慢」と呟き、「自分」と戦ってきました。

最近になり、今まで程の激しい葛藤はなくなり、自分なりに安定してきたように思います。そして今度は、相手の気持ちに関わるという事の難しさをひしひしと感じるようになりました。日頃、相手に気持ちを傾け、相手の気持ちに添おうとしながら関わっているつもりでも、これが思うようにいかず、時には自分がどうしようとしているのか分からなくなることがあります。こんな時、主任の先生が代わって関わってくれ、その後ろに受けるスーパードライブで、主任の先生の利用者に対するきめの細かさを痛烈に感じます。分かったような気持ちで利用者に関わっていると、一挙に崖の下へ突き落とされてしまうのです。

このように、あれやこれやと考えていくと、自分に足りないものや、甘さがたくさんあることを感じるばかりです。一挙に変わっていくとは思っていませんが、それでも、少しずつ変化してきている「自分」をしっかりと見つめ、人の気持ちを大切に、「自分との勝負」の中で、人との深い関わりを育てていきたいと思えます。

(高島平五丁目福祉園)

嬉泉の出来事

〈子どもの生活研究所〉

保育室への補助金

世田谷区には、保育室連絡協議会（世保連）という団体があり、嬉泉では、保育室である子どものへやが加盟しています。この団体は、子どものへやのような行政からの補助金を受けている保育室の団体であり、世田谷区に対して予算を含めたさまざまな交渉を行っています。

世保連では、昨年、世田谷区長と直接話し合う機会を得て、その席上、かねてよりの懸案であった保育室に対する施設整備費の約束をとりつけることができました。そして、このほど、この補助金が確定し、一施設あたり70万円の補助金をいただけることとなりました。そして、子どものへやでは、今年度行った内装工事等に充当させていただきました。子どものへやを含めた子どもの

生活研究所の建物は、老朽化が進み、修繕のために確保できる予算も十分とは言えません。子ども

のへやに対する補助金の中で建物の修繕に回せるものは、わずかな金額であり、建物の修繕にかかる費用の大部分は、法人が負担してきました。このような状況の中で、今回の補助金が決まったことは、修繕費の軽減にもつながり、喜ばしいことです。今回の補助金をきっかけとして、保育室に対する補助金等の充実がなされていくことを望んでいます。（小池 朗）

〈袖ヶ浦〉

香港政府の調査団

去る一月十一日、袖ヶ浦の学園に「香港政府衛生福祉省自閉症研究グループ」の方々が来園されました。受入には日本政府として厚生省渡辺専門官、法人から石井所長他が当たりました。来日の目的は、わが国の自閉症療育や実態の

調査研究です。

メンバーは、香港政府のリハビリテーション局長を団長にわが国の厚生省文部省に当たる省庁の次官局長クラスの方、及び香港を代表する小児精神科医・養護学校長・福祉施設長といったプロジェクトチームの方々でした。

学園では、実際の療育場面や建物設備をくまなく見学され、その後、石井所長がビデオを使いながら講義、質疑応答となりました。さすがに各界のトップクラスの面々で、見学中から次々と質問が飛び交いました。制度も異なり措置のシステムに関心が大きかったよう



ですが、さらに自閉症の発生率や診断評価、治療教育法、年長者へのリハビリテーション等々予定の時間を大幅に延長しながらも皆さん全く疲れを見せずに精力的なやりとりが続きました。（友田 篤）

親子合同新年会

一月二十五日、袖ヶ浦では四年ぶりの親子合同新年会が行われました。

ボランティアの方が後で、「本当に、大人の新年会の様でしたよ。」と言ってくれた様に、会場内は、飲めや歌えの宴会ムードに包まれました。特にそのきっかけとなったのは、斉藤君の『お富さん』でした。調子の良い伴奏と手拍子が始まり、独特の歌いまわしで歌い出すと、雰囲気が一変と盛り上がり出しました。日頃のカラオケで歌い慣れているだけに斉藤君自身も余裕の笑顔、みのり組先生達も、「やってくれた！」といった表情でした。そして次々と飛び入り参加があり、それを見ている参加者もその場にとけ込んで楽しい一時を過ごしました。

皆さん、おしゃれをして、男性



はスーツでキメてくれていました。この日の為に、職員と洋服を買に行った利用者もいました。

また、食べっぷりといったそれはすばらしく、利用者は、料理・飲み物を一通り食べ終わると満足気にしていました。それぞれの親子の普段の様子もかいま見ることができました。

最後に、新しく成人した四人のお祝いできたことも嬉しい出来事でした。(矢沢恭子)

〈赤塚・高島平〉

赤塚事務の窓口から

赤塚福祉園を訪れる人達がまず始めに顔を覗かせるのが事務室で

す。保護者、地域の方々を始め、ボランティアを希望する方、果ては道を聞きにくる人、トイレを借りにくる人まで、実に様々な人が、様々な目的で赤塚福祉園を訪れ、事務室の私達も園の窓口として心地良い応対を、と思い接するよう努めています。

ところで近頃では、外から人が訪れるだけで無く、福祉園の利用者も、お昼休みなどに事務室を訪れて、事務室の職員と一緒にお茶を飲んだりしてくつろいでいます。ほほえみグループのF君や、かがやきグループのE君、特にE君は先生が事務室に呼びに来るまで応接の椅子でニコニコしながら座っています。ある時のこと、E君が事務職員が買ってきた缶コーヒーを勝手に飲み干し、先生に怒られました。しかし当の本人はすぐに事務室に戻ってきては、又ニコニコ顔で本当に満足そうな表情を見せていました。

事務室をよく訪れる利用者の方も一人、F君は、昼休みに食事を誰よりも早く食べてから事務室にやってきました。最初は実際の職員の椅子に悠然と座り、自分でいれたお茶をゆっくりと飲んでいました。

それを見た職員が「F君、僕もお茶を飲みたいな。」と言うと、急須にお茶葉をたくさん入れて、ポットからお湯を注ぎ、お盆に載せて出してくれました。

F君は最近、事務室を訪れる回数が減ってきているので、事務職員一同寂しい思いをしています。

このように事務室には、実に様々な人が立ち寄り、私達にうるおいを与えてくれます。同時に赤塚福祉園の窓口としての責任とその役割の重みを痛感させられます。これからも色々な人達が気軽に事務室を訪れてくれることを事務職員一同望んでいます。(宮川政信)

高島平五丁目福祉園

「成人の祝い」

「成人式」という言葉には、特別の意味合いが込められているように感じます。子どもから大人へと成長していく中でこのひとつの節目として、成人になる利用者にとっては「この式を経て大人の仲間入りをしていくのだ」という思いが、親御さんにとっては「よくぞここまで育ててくれた」という感慨が、この言葉によって喚起されるように思われます。そんなことをあらためて感じさせられたのが、去る

一月二十六日に行われた「成人の祝い」行事でした。

高島平五丁目福祉園には、今年成人式を迎える利用者が十一名在籍しています。そのみなさんをお祝いしたいという職員の気持ちと、我が子と共に喜びたいという親御さんの気持ちが一つになって、この行事は企画されました。

当日は、普段とは打って変わってフォーマルな装いをした職員が、これまたおめかししてきた利用者のみなさんと親御さんとを迎えました。利用者のみなさんは、ここぞという感じでとっておきのスーツを着てきたり、朝六時から美容院に行つて髪の毛と振り袖の着付けをしてきたりと、気合い十分でした。それから一緒に、池袋の東武百貨店にあるバンケットホールへ出掛けていき、ちょっと気取ったパーティーのような雰囲気ので、ブッフエスタイルの昼食と、ヴィオラの生演奏を楽しみ、シャンパンで乾杯しました。そして最後に、職員からのお祝いのプレゼンテーション、親御さんからの花束を、嬉しそうに、ちよっぴり誇らしそうに受けとる横顔を見て、先のような思いをあらたにしたのでした。

(石井 啓)

ひかりのタイムス

独立第24号

ひかりのタイムスは、嬉泉広報責任者の友田氏がアドバイザーで、利用者の山岸が編集長をしています。

ひかりの十年を回顧する

山岸 裕

ひかりの十年迎えて時の経つのは早い。八十四年秋、ルンルン寮の生活をT君とした。今のつづきの家の雛形のような物で寮に二人同居した。狭い部屋の中を二人が入り狭くて大変な思いをした。その時は電気・水道・ガス料金は学園持ちだった記憶がある。今のつづきの家はこの辺が自分持ちでのかかる負担があるし、迷ってしまうのが本音だろう。

さて大変なのがこの同居する部屋の住人との人間関係で、お互い唾み合う。そういう時先生が間にあって寮会を開いた事もあった。部屋で一緒になると気まずく言葉交わさない時もあった。物をいじったりしてトラブルになり喧嘩した事も若気のいたりであった。

今はT君とも歳月が流れて表面的には言葉交わすようになったが、そこまでいくのに時間がかかった。八十四年のひかりの生活はドラ

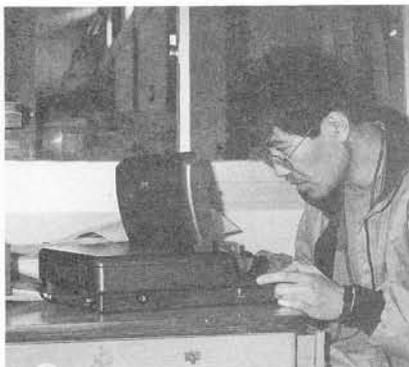
イブに行き、木更津の卸売り市場に買物に行くという生活がほとんどだった。楽しかった思い出があったと記憶している。

八十五年は作業体制がスタートして僕は販売に配属された。週一回の東京の嬉泉本部に販売する。その後新路という喫茶店に行きコーヒーを飲むのが楽しみだった。この喫茶店が閉店した時は残念だった。パン販売で最初は袖ヶ浦のスーパーで店頭販売をした。店頭販売夜寒くて計算間違いのストレスで自宅で物を投げた事もあった。八十七年タイエー進出でスーパーの売れ行き悪くなり移動販売をする事になった。ここからいわゆる巡回販売の始まりである。この時

あちこち車で回り楽しかった記憶がある。しかし激しい販売競争に巻き込まれた事はいうまでもない。八十八年記憶に今も残るガソリンスタンドでの実習。車の窓ふき・スタンドの掃除などをした。その後暇で私用電話かけて首になる悲劇を経験した。悲劇から約6年が経った。このショックの後今も覚えている。理由もわからず突然来るなど言われても納得行かない。

社長から通告された方が、ストリートに伝わって良かったな。ただ時が経ってこの辺が解雇の理由かなと思う節はある。ただ今はそれを言う時期ではないと私は思うのでこの場では言わない。

この事が翌年のスーパー実習の話を通る遠因になる。なぜなのか



理由がわからず断った記憶がある。ただ一つ分かった事がある。不況風で首を切られる人達の事を自分の体験に当て嵌めて想像するようになった事は大きいと私は思う。

スーパー実習の話といえば店頭販売していた時の店長のH氏が、人柄のいい人で実習を当時の担当者が持ち掛けた。社長のツルの一声で「障害者を雇う暇はない」でつぶれた。悔しかった。何も言えなかった。H氏が「俺はやりたかったが...。社長のツルの一声で駄目になってごめん」と語って詫びたのを覚えている。無念の表情だった。そのH氏も学園に学園したり交友を深めたが、八十九年にスーパーを辞めて音信不通になる。今何をしてるのだろうか???

それと八十八年は僕に取ってエポックメイキングな年だった。石井先生と共に共著で本を出した年でもあった。その賞賛の声に弱れて自分を見失ったのは昨日の事のように覚えている。これは自戒して二度とないように何かいい事があっても浮かれないように自分をコントロールしている。

八十九年当時の担当者の発案で雑巾を縫う。草取り等をする。雑巾を縫うのは楽しかった。今も役

に立ってる。

九十年、三十代に突入する。販売担当者がM氏になり計算する時厳しくチェックされて、間違える度にビクビクした。怖かった。彼が退職するとホッとした。

誰にも悩みを打ち明けずに悶々としていた。打ち明けると相手から何か言われる不安が掠めて誰にも言えなかった。販売をしてた時は時間が取れず先生と面談がなかったけど、忙しくて出来なかった。九十一年に陶芸に移ってから、時間が出来て戸屋先生と面談出来るようになった。九十三年から面談で具体的にどう何をやるか、私に取って難しい課題ばかりつきつかれてしまい、内容がある意味で未消化のまま悩んでいる。

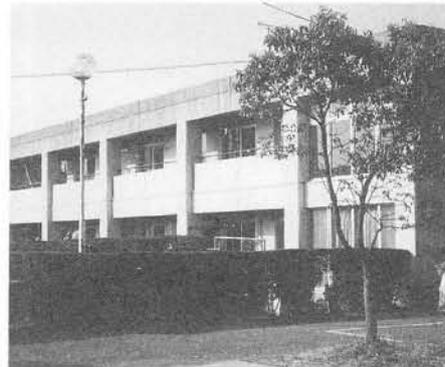
それと並行して寮生活である事件があった。もう時効になっただろうからこの場で述べるがある女子職員の下着を乾燥機で干すので干した。これの後目もろくかと思つた。首は吊れなかったコソソリ一目につかないように人のいない時を盗んでやってたがバレてビクビクした。もう一つある職員寮の女子風呂コソソリ覗いて女子職員にバレて逃げた事もあった。寮生活というとその事を思い出す。今は

そういう事はやめましたよ。

九十一年寮生活から元の学園生活に戻る。担当は戸屋先生に変わる。この春ミスター先生の急逝は残念であった。晩年はミセス先生の介護を受ける立場になり癌で体力を落とされたのは悲しい。ミスター先生に教わった事は心の中で生きていくし、思いで作りをしてくれた。含蓄ある話しも聞けないと思うと残念である。記憶の片隅にある先生はいても、思い出に残る先生は少ない。八十五年に急死した小林和雄先生もその例に漏れない。先生のお嬢さんが、九十四年に袖ヶ浦に実習に来た時は、先生の生き写しかと思つた。

これ以降九十年代前半は大激動が襲い社会参加の時代の流れの中で翻弄されて気がついていたら取り残された。呆然自失としている。そこから巻き返すべきか、自分でも迷っている。

①三浦旅行の悪戦苦闘。自分達で食事作ったりして企画立てたりして悪戦苦闘。しんどい思いだけした。利用者同志でチーム組むとすったもんだの連続で苦しんだ経験とストレスだけ覚えてる。これがきっかけになり、あゆみ文集の話しが持ち上がる。



②編集の仕事をしたという事で文集編集をしたが、失敗の連続その通りテレビでイメージした通り出来るかと思つたら、意外に出来ない。編集顧問に怒鳴られるわ。厚い壁は出て来る。クリアしたのは顧問との協力した時だった。後は企画立てるのも悪戦苦闘の連続だ。仕事の段取り・根回し基本計画策定一苦労山あり谷あり。仕事のコツがつかめれば、悟ればうまくいくんだろうな。不器用な私だという事がよくわかった。

③評価受けない労働報酬への不満。九十年代に作業の労働報酬が導入されたが、評価低くてなぜかわからず苦しむ。

④つづきの家に行く利用者に先

越された焦りと並行して親無き後の不安。横浜で仕事はしたいし、現実に妥協したとして学園の近くじゃね……首切られる不安。横浜での人間関係手放す不安が頭を掠めてしまう。希望の仕事を受協してまで下げてすでに自立の道を歩むライバル達と同じ土俵に立つのは本を書いた著書のプライドが許さない。この事はひとまず置く。

個人的な環境の変化について述べよう。祖母が九十三年倒れ母と親戚が介護をする。この事で高齢化の不安がしのび寄る。それらの事が渦巻き自信を喪失している。それでも仕事だけはしたい意欲と気力・体力はある。希望の仕事は①コンピュータの仕事②編集の仕事③希望している。それ以外の仕事も考えてるが、一度就職してから転職する時やってみるといふ計画である。生活の自立は仕事の事がメド経ってから、トイレ掃除とか汚れる家事は嫌だし、するべきかどうか検討中である。一人暮らしとなると火の管理に自信はないし……いろいろな不安の種に事かかない。でもこうひかりの十年振り返るといろいろなる事があった。私の未来は神のみぞ知る。

(袖ヶ浦ひかりの学園利用者)